和歌七部之抄

詠歌大概全

伊地知文庫
文庫20
292
4

文庫20
292
4

伊地知氏書冊

詠歌大概抄

情ヲ以テ新ニ為ル先ト未ダ詠ズ之ヲ心詠ズ之ヲ詞ヲ以テ舊ニ可シ

用ヒ不ル可カラ二代集ニ人達シ不用ヒ風體ヲ可シ勵ム

新古今ノ古人ニ可キ用ヒシ

能先達ニ達シ秀歌ニ不拘古今遠近ノ見宜キ奇ヲ勵ム其ノ体ヲ近代之人ハ

詠ズ之ヲ心詞雖モ一句謹テ可キ染ム奇ヲ之ヲ七八十年以来シ

人ニ可キ不ル新ニ心詞勢ヒ不ル可キ取用ヒシ

於古人歌ニ多ク以テ其ノ詞詠ズ

之ヲ已ニ為ス流例ト但シ取リ古歌ヲ詠ズ新奇ノ事

五句中ノ及ブ三句者尚多分無ル氣二句

しらしつ三四字先(メニ)之(ノ)句(ニ)を案(ヒヨ)し以同夏詠古
歌詞漸無念之処 梁塵秘抄 詠花 詠月 詠月に四季哥に詠之雜
哥に恋雜哥に詠四季歌如此之時意取
古哥之雜(ナニ)之処
是ハ乃心時鳥
久方乃月ハ乃
如此こそ道ハ人
如此し夏全清ハ何度不怪(ヒカ)し

春ハ山内より出ル事ハ
桜散ル事乃下風

月ハ何ゝ出ル事や昔
ハ乃ゝ此乃石ハ浦

如此し歌ハ二句更不可詠之
常観念古歌し景氣可深心付ハ見習
者古今伊勢物語後撰拾遺三十六人集し内
持上手歌て色心人麿貫之忠岑伊勢小町
等(ラガ)歌之清雅和哥しを達時宗し京ハ世
乃し盛衰(ニヤウスイ)為ハ物中(ナカニ)白氏文集第一第二

恒常可極歟 深道奉しる人和歌意師通只以
舊説為師深ゝ古風明詞於先生者誰人
不称ゝ哉

詠歌大概

詠歌大概

詠歌大概と申は心を詠ずる法は十分乃物
七八分をうと云心なりたとへハ河を見よ
搖ものをもてもゝ石をせきあゝ流るゝ人とまりて越
て行よりゝひかゝさ支大概乃心也又大海は
網をおろすに網ハ大概と申ハあゝ丸めとゝく
くゝ丸めるゝ一重成大概と云て大概大概
同夏ゝ亦云ハ大概ハ文ゝ句ゝ清ゝかゝさ
ゝとなるゝ大概乃心者乃秀ゝ三藤藤名院仍
号入道殿古説云ハ一冊ハ後鳥羽院御子掃部宮

[illegible]親王定家卿へ寄せ讀ませ給ひて
後ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]なり
[illegible]事多大概[illegible]ハ[illegible]年[illegible]
[illegible]ハ[illegible]年[illegible]ハ尋と心得へし

一詠歌へ　詠吟へ　字[illegible]

書　詩　言志　永言　詠歌反字同　有心為志
[illegible]ハ為詩　[illegible]ハ寄　詠　諸必集[illegible]記
事詠一物　詠ハ求ハ[illegible]

一歌と[illegible]ハ惣名なり

一大概　大概　史記云　小概と蓋と讀也　そもそと

[illegible]ハ大略大概へ大概ハ大略也
蓋也凡と[illegible]心へ
[illegible]新為先　求人未詠し心詠
心云謙し三と[illegible]時ハ情乃字を[illegible]詠し心
[illegible]なり謙ハ分別して物を思案
[illegible]人の[illegible]詠せ[illegible]心成
[illegible]詠せんと心[illegible]
[illegible]と云詞を[illegible]
[illegible]人し来詠者も
[illegible]人けまして途中ハ金と

おもふかたく自然とおのつから成事之序孝云
心ハたとへハいはんよ之玄妙なる物を分別する心也
識も又めくりさき心也 情ハ字通するゆへに
水と浪と別りまよひとさとりもあれハこそ
本来云此情乃字心を斥と云心斥によりさゝの
ゆゑに其字を用ゆる也 萬物乃色自然とある
自然に白くもあり黒くも見ゆる也 清濁ハ立
心斥にまかする事なり 深く思ふ入心にあるを
入と云ふ法華経にも情存妙法とありまよふ
しかも心なる心をあかし
心に浮みて後の新事を思ふ事成と

詞とハあたらしきを求めて心をさへあたらしく
此頃ハ連歌をも専とする流之もとも人に求むる
とあり 十住心論 心敬僧都 連歌云
○二ツなき人と成りしより世にと云句有
○たゝ月はなくなる花ありけんと付る句あり
前句をも云道輪廻とかなしくそむきまて
とき流を付る時ハ人生うけかたき物なれハ
生あひかたき時にあひ月花に花りくらし
けんとこめ此心をぬる人にもなし作者にあらさる
とふし又伊勢物語に○春日野の若紫のすり衣

思ふ人の見るまじかさらに志らし我をとし○陸奥
のしのぶもぢずり誰ゆへに乱れ初にしわれならなく
にと云哥は河原大臣の心はわれゆへに我は乱れ
初し君故にこそみだれそめたれと云義也上ハ序
哥也それを用ひてたとしかしつる也女の心
ハたまたま軽く此思ひまくらん我ゆへまてハなき
しと也 源氏の玉かつらの巻にも同し哥
をひきうつしてその心をあらはして志るし
たる也べし此段文秘事とく

一 情以新 稀有流麦陽気玄 性常情也心得る

と情と伝ふ之 翻書好女徒如動人情

詞以旧可用 詞不出三代集先達之不用 新古今古人哥同可用之

細字書の分詞ハまづとく可用と云を
得しをる也 伝つるに細字の分ハ皆此段
詞の心ハ歌の道をとく深せしと云へて末代
の人の思のまゝに伝ふなる詞をも可離れるなく
志めしとる也 伝ふるやさしく新古今古人の
哥同しく萬葉集三代集の作者のとはとる
やさしと云ふ心なり哥を乱れがましく詠ませ
しとの事也 成るし侍也 又定家卿の讀みかたの

口傳といふ物よ事、初て聞て讀へしとも
又云定家卿歌ハ別れ初とく形一是を
古初と申り形ゆへとうと梅花院殿の抗
云奇を藏乃道よ叶とを知とり巻後 後嵯
定家 家隆 寂蓮 此人を是を為とし
一宗を觀る歌を為家へ伝つ孫ら是一時風神
あしく海ゆまを神よ此身と行しまれ
ら此ゆ之是後伊歌を詠そして
出ら此ゆ之一人心如面
一為家心ハ如くとも初つ是ゆ是奇

此一解と云
○情ハ如ゆ山おろし此遠よ何と今此者
夜独孫此奇ハ人ら此ハ後嵯御云
心を如ゆ此を初をかとゆ此を亦ハ
と形
一初ハ舊可蘭初不て勿三代集たとハ三代集
嵯ゆ此ハ此ハ詞ゆ此ハ亦そこよ
分ハ
一先達一取用只此達用来而此初ゆ此
新古今ハ初ハ乃人ハ見ら人ら此心を人ら

思ふもの者と也不てお三代集と云てあ
大ふ成度と云風ふ〳〵花中求花中拾
玉は心歌讀は思ふ者四〳〵
一後成卿云○月やあらぬ春やむかしの春成
宮ふ心ふ山ふ成寄風情と学へ〳〵と云
風體可働德能先達之秀句（不論古今遠近見宜一句可働之歟）
家ふる親の
夏家ニひき
ふ山朝を慕は成ふかりて去を
仰つ成集奉仰法之作者ふ成ん
ふ〳〵とみく〳〵なふ〳〵ふ〳〵ふ雨中作
の歌は中ふ

○海ふ月影光を添ふ月ふ海ふ月影光を添ふ
○折ふ春ふ雨ふ春ふ雨ふ折ふ春ふ雨ふ
○野ふ雲ふ雲ふ野ふ雲ふ
如成風雅と云ふ者ふ成ふ
ふ〳〵ふ〳〵ふ世ふ〳〵ふ〳〵ふ
〳〵学へ〳〵ふ成ふ
ふ〳〵ふ後学ふ記〳〵ふ
定家ふ者ふ〳〵ふ物ふ成奇と号ふ
意ふ〳〵ふ〳〵ふ
ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ中ふ月ふ出〳〵

たゝやうなへ一歌乃風体をさ所へ代と有
まうしきゝ乱うしき河へ者も亦有あ人
乃心とあしらハせ事ハ毛詩第一云治世
し者安ゝ樂其政和　乱世し者怨以怒其
政乖　高云雨中吟も見集記も同一変
乃風ゝ無ハ作者ハ心を一かゝりて作る也
雨中吟ハ毎歌なるの心持をゝ作ゝ
なゝく思案をふとて風情乃ゝ歌之當
よ人ハ心入ゝ樂しゝ事と後ゝ見作者て
我演作者ハ心ハ作者本わゝ

ゝ作者ハ心得ゝ作者ハ事ハ
風情乃ゝ作ゝ
○情ゝ育ハ持ゝ
雨中吟ハ心ゝ作ゝ
毎中吟乃事ハ
一風躰作ゝ
ハ情ゝ作者ハ事ハ
ゝて色ハ事ハ作ゝ人の事
ゝ作ゝ毛ハ事ハ作ゝ
後成ゝ遠情ハ百首作者ハ

くしき心なりけりと也あしいかにも
風體形容如此也　定家卿於子孫
まて勅勘を蒙りても其まゝにゆるされて後
みられ面目となりしと也

近代之人所詠出之心詞雖為一句謹可除棄之

七八十年以来之人歌所詠出之詞努々不可取用之

此詞ハ定家卿の禁制詞としてかたくいましめらるゝところ
ことにハあらためしあるべき詞ならんとなり
さやうの詞をとりて詠ことなかれ七八十年以来の

後鳥羽院第二

順徳院の時分より前七八十年よりなるべし然ハ

鳥羽院第二

崇徳院の時代よりこのかたの人の歌なるべしさにも
ありける詞の事ハ卿も其の時代之例なと用捨ありし

一近代之人

○甲斐が嶺ハさやにも見しかけれなくよこほりふせるさやの中山　雅経

○桜花咲にし時ハかつらきの山のすかたにかゝれる白雲　為家

年已来之花相似歳已年之人不同

一七八十年　二条院の時　應保二年定家誕生

後鳥羽千二　定家卿六十一歳の年　寛喜元　堀河宮へ進上

後堀川院の代よりその七八十年以前の変し

於古人歌者多以其同詞詠之已為流例　但取

古哥詠新哥夏五句中及二句者既多無称

氣二句より上三四字多しかれども於案之

年者三哥ハ連歌ノ心ニ
ヘ[illegible]ル歌ヲ
スクナクトリ
人ハ[illegible]
ヲ[illegible]ハ多ク
[illegible]

初より古人乃歌初是と詠せるとい[illegible]

りの山時鳥れ[illegible]の音文れ[illegible]

可称とこめけるなき初とハ二句うん初こ

称三字是とゆゑ[illegible]ハ○是汀の山

称ヲとめとさく我待君成ものとむる

是と年哥こうゆ

定家

年者ハ称ヲとハ称ヲ[illegible]
○哥初の山称ヲとゆゑ[illegible]

年歌ハ

○年ゆゑハ我里[illegible]と白川乃[illegible]

山哥と[illegible]

定家

○年ゆゑハ我里[illegible]と白糸[illegible]乃名と[illegible]

山歌ハ

○山川ハ[illegible]

見とそえて

家隆卿

○山川ハ[illegible]

山家[illegible]哥と[illegible]

定家ハ山歌なり[illegible]

式家隆卿此歌を定家卿心なきかすゝ侍らぬ也
しかれども二句九上三句字是をゆるされ
是と案ずるに二句乃上を伊勢ハ○是河の
山吹島○如なれ道ゆ人なとのたゝひ乃初句
二句上三句字是と侍るとゝ山○山川の風乃
きゝうとゝ云初句を一句一字初と二句九上字
うゝ也侍る歌也

一打古人歌　為家ハ五句四字うゝ夏貴人
うゝを但可有のとゝ

一取古歌　古歌と取本文変也上ハ歌

○手よりうんと雲かや繁りし
式歌定家九心よ海ゝ
○春初山花咲ぬしを逢坂関のこるゝ白風
毎首花簾為家様
○清瀬流宿とゝ山清流山かゝ
○掬数水のかゝ
式同事詠古歌初句変
花をゝみたりんと歌ゝて屋ゝ今乃歌
都と浦月を清ゝうんと歌ゝ月ゝ
ゝ云意念感ゝ

花詠花月詠月

秀句又云作り方と云て夏の月の及川 長川
大概は心也○月まれ山の時鳥ゆていつくへ
おくれ出さまくいはれ
おくれ出さまくいはれ
基俊 これは本の歌の心あり
忘れ草 以下李白詩 忘れ草 忘れ草 忘れ草 忘れ草 忘れ草 忘れ草
時 古歌 こ歌
山陰は初まりて
ゆくへ
○朝日氣匂ふ山の端月はあるさ長谷山こしみ
はるこしたかず
是と云く
有家
○朝日氣匂ふ山の梅花 郷面こそ思ひ
又古今歌

○こ詞は山の日の郷
是と云く
雅經
○こ詞は山の猫小春文て古郷の衣ぬ
かゆ山は春まて心得作り
歌百人一首也
○こ詞は山の猫小春文て古郷の衣ぬ
かゆ山は春まて心得作り
歌百人一首也
以思新詠 李白詩 思新詠
新詠 思新詠 李白詩 愚問賢注 ○ 文
此文 河原 水 こん 志賀 浦
波 と云て 家隆 ○ 志賀 浦 遠

月清きうつ水とかすみあるうの月○ふるあらん
人とはしらしやうの沈れ国の郷波とうの玉の気色
と是と有く寒家て○霞り那波の玉の曙
心ちれなと月と別て作又定家て○大宮ハ梅の
匂ひよ霞て星うとそなる玉の歌乃月中
歌ふ○題と時ふ星と星ふ玉玉歌の月
月歌ふ玉て物ふ玉ふ玉人丸ふ○月乃山
乃端ふ月待ふ人ハ待ふ人ハ待ふ玉て
是と玉ふく新河○山の端ふ玉ふ月ふ
歌中九月出ふ玉ふ云ふん玉ふ歌ふ玉ふ又定家て

○郭ふたく旅ハて玉ふ海ふ玉ふ月ふ玉
夕ふ物ふ玉ふ歌ふ玉○湖ふ玉ふ宿ふ玉ふ
て旅ふ玉ふ玉て玉ふ秋乃夕ふ玉ふ一花ふ玉
ふ玉ふ古歌ふ玉ふんふ玉ふ玉ふ玉ふ玉ふ
仍是沖新し

是河の山河鳥　みなし山　高野山　久堅乃の桂
郭公帰りや月　郭公の道り人
嵯峨金沢河度不稀之
是ハ右ふ作て二句乃上三字ハ玉ふ玉ふ
玉ふ玉て作ふ詞し

年の内ニ春ハきにけり　月やあらぬ春やむかし
ほのぼのと散まの下風　ほのぼのと明石の浦
如此之類猶二句文不可詠之
是ハ一句を略して詠とみえたる制詞
なりとゆふたびとなへし　亦云　如此詞ハ
能いり狂も作る人あれども　写前の詞とおなし
大概ノ心也
常ニ観念古歌之景気可染心　殊ニ見明へき古今
伊勢物語　後撰　拾遺　三十六人集之内殊上手
可掛心　人丸　貫之　忠岑　伊勢　小町等之類

古今伊勢物語ハ [illegible]

此詞ハ古き年のまことを詠吟して
其心詞をかしみよ歌の姿と思惟せよとなり
勅撰とのたまへくハ伊勢物語を未まなべし
古き古むとまへくハ伊勢物語をよみ侍
先づ古今　伊勢物語　後撰　拾遺とかく於
三代集二代集あり一其ハ花実相対の集なれ
ハ古今を勅撰して伊勢物語と一向花なる
花を本として物語をのせ次て実を本の後撰
と出されたる時一　一代時代を本に出人伊勢
物語とのちに出されても勅撰と云古今を本

いめ給のる所ん古今とのたまへる謂る一句に
撰集ちと注たる人あれハ伊勢物語といひ名物とさ
しるされ事も無念なる古今伊勢物語とる
まへ給ふと云ふれば義を可給と伊勢物語撰作者
と書れ侍るにとて伊勢小町ふしむ有云一
と給まゝ又此書に人数有へしと云ふ此変法一帖の
秘事するなる也家記云ふ也宮詞和歌深題筆念
りやとおかしき事とも物しん人々ものこれハ赤人
とハかけし之古今の序に人丸ハ赤人ハかしけり
たんすかく赤人ハ人丸かりまたかん事

かくらん有けるといひて哥は男絶妙の作者や
の旨あらはせるは此人の外古今にあらはすいへる六
人の人々と作者にあらざるを注せんこそ世にまたみ
と云ふく古今にいへるとものなけるは序に作
し此事とも歌の心ともはあらはさぬ人をつる
乱りの姉まりと書て六人と作しをかりいふ
よるよ注さく文琳の義をは注せぬは真名序に
八二三人と書て其人々は僧正遍照在原業平
文屋康秀宇治山之僧喜撰小野小町大伴
黒主也貫之忠岑ハ彼集の撰者なれハ入

作りぬる人は作りぬる人の名小町、
古今より作る歌一四よあるうちに、何歌を作り
歌かるられる人の名と作る人は赤人小町と
つ人はうれしうれしう姫と作り歌作り同席より
小町は作る人はうれしうれしう姫作り歌作り
作りはるとうれしう姫は野津鳴乃明神乃
しませんや乃作り歌作り
表撰おいて平六人の日あい作りと為りく
あるひなりとつるつるつくるる歌とうく
作りへうへうへうへうへうへうへうへ

とも歌れ心とも人とは序とも作る
見うくうくうくうくうくうくうくうくう
一冊乃源秘くみうよ人は相伝とくうくうくう物
也毎云は新とうくうくうくう平六人乃中とも
よりの乃れはなく人よりて我ものの人
れ変物くくくくくくくくくくくくくくくく
とかくくくくくくくくくくくくくくくく
心は男女とも女とくくくくくくくくくく
人数とくくくくくくくくくくくくくくく
作る歌れ事物くくくくくくくくくくくく

ゆゑにはさらにいはんや大概の心ばへ一体新のるものなり
二人しかせれば是はいはんやまして物まねするさま事
ふるまひなどもとくとくかの家風なるべきにはかれよりは
なほ〳〵とて心ばせはいとおほきなれば人数なりとぞ
ある人いとあるべきにあらず藤原為忠
既云
常縁答古歌意気古今と万葉なる
べきの美趣なる深い意味とて伊勢物語は花ゆゑ
花ゆゑ言葉入らぬとて歌をいはんとて
とかくとかく潤色いはんなるべきなり

ゆゑにはさらにいはんや
浪漫和歌とくに時代とくに景気世間盛衰
為和物語白氏文集分一半二帳帷可拙歌
深通和言とく心
はれの心ばへ時代とくに景気とかくいへば家持
言葉○影はとくに霜の白さ
みどころ取て文章自然霜夜月の晴れ空
の景気なべて此歌は月落烏啼霜満天と
とくに影とくに鶴わたるとかくに天と又時代の
気色とくいかなる時代とくに

かく〳〵実と云一義とまことにかくのごとくなるべしの
業教は勇に結ひ付くる事業平様〳〵
然るに時やうにかんがへたるめ弱さかな
もとより此事のかくのごとくなる時やうにて
はんん花を翫ぶ人〳〵なるべしとかくの
ごとくなるべしとかくの如くなるべし
此の事を時節に寄せるものなり
しかれば和漢門せう河行業の時は特に行業
老年かくの如く業庶鷹ひよりけ也と我身に上
と若屋にも出るとかくのごとくなる鷹とかく

ゆれども是はかくのごとくなる○かくのごとくひと
〳〵をかう表事にかくのごとくなる毋屋も帝の
御とかくのごとくなるべしとかくのごとくなる
四年たけなる世紀と我ひとり事よりこれを
かくのごとくなる文あるかくのごとくなるべし是時に
此事乳と和行かくのごとくなる風雅はみちかくの
事ようなるかくて完悟とかくのごとくなる世間感嘆
とかくのごとくなるかくのごとくなる親しくて方を
と深山とかくのごとくなる一とかくのごとくなる行ふ事
物の中にかくのごとくなる白氏文集第一巻二

帳をとりて内をうかがいて心を現習ひ長恨歌
は門よりあり是をみるに白楽天の如くに白氏文集
の屏風にして京道に通用せしとぞ
高山清兵衛和尚うたせ給ひしに白楽天の文也
感嘆しとかさうらうおかんしは楽天の
也恨歌 楊貴妃 楊貴妃死 玄宗
裏とあるは白物と家にくの物をうつす
中にとりては恨歌
春風桃李花開日秋露梧桐葉落時はじめて
楊貴妃死 感嘆 乃白氏文集 現習ひ

とおもひ乃恨安宗 楊貴妃 といふ
是し感嘆又おとろかす義乃ふる心
時八万民そこきやうしたりしに老く落ち
浮陽と作へ江過よりあうして日数送りた
涙へはの過くるを現習とたんしる
心とおくさめけうかん藤花院爰沸紀云
清兵衛和歌し玄宗楽てい和尚の御近よ
乃ふ玄宗集をみるいと院ちう
一時景気則玄宗と御近よせうく家へ
中ふ乃ふ

一物中　定家卿かのみうを通て物をきれる
ことのくゝしとかなをよをとゝ俗ことのう
と可濫大学之物有事来事有統始物之
変形
一帖帖書家文集七巻一帖ゝ第一第二の
帖毋は詩あるようにて是をみるゝ長歌
を皆文
和歌無師匠近代沙汰高尚為師源心於古風習和
文達者詠人不稀之歌
詞新第毋和寄よる師道なるとゝひ来毋は

詞と文達よるゝ〜ゝと有うゝ中家相遠
〜作り是又和歌事之俗詞をそん道よるゝ
毋和毋を師道なるゝと云んゝ二を面をんゝ
為〜作ゝく和歌と作ゝ六代集乃一書乃詞よ
情〜新為をゝと作ゝて師道なるゝゝ云
〜あゝゝ寺を変ゝ我ゝと思業〜あゝて
為ゝきゝるれゝ師ゝ有ゝゝ長ゝ作ゝゝ古ゝて
乃序毋をゝ人乃心をゝ多孫ゝて義ゝ云の
業ゝをゝ為ゝ事源ゝ作ゝ付ゝゝ我ゝ乃
和毋別ゝ師ゝを有ゝゝゝ心をあゝゝゝく

心事成めらるゝさく鬘帝乃風躰を見
るゝ毎に〳〵と也初とせんをよりあつまりて
初よりかゝる事をかゝる人〳〵其後
明らめらるゝてを心得らるゝやうや此初
心家代伊勢小町敷みりとなる毎に
前世を遊らるゝ心あるゝ人〳〵さらに亦
之和哥無師道にて演切くて心はく所以
鬘帝乃師とゝい毎乃まよ乳をはよ入まくハ
親はりさるれのゝ入百い無師道よあるゝ也
四方師とゝ心を古風よりあ初とせんを

みゝらる詠人ゝ郷せらるんやとそうさやうゝ
師道にゝ有るくゝ非人を帝ゝ人ゝ変
まて非ゝ海ゝんやとくゝ乃ゝんゝあるゝ
ゝ成ゝて作ゝ心よかりて
我心一よ情を入くゝ演ゝ見るれて演人も稱
よ大事乃物〳〵ゝ代心得ゝ時乃ことは
ん行ゝ也作ゝ也ゝ一番代情ハ以新為先ゝ云
初とゝ詞毎以よとゝさくゝ保秘ゝ習ゝ不可省
口ゝ者也可秘ゝ〳〵ゝ代来と又云ゝ代法の分ハ
意我法橋おゝ伝ゝくゝ家秘流ハ師道にて又習

約束人達〻云也以墨汁垂分と共同古今序
を引事を秘よりて篠名院義法統云
和歌六帖道　　六帖教授形要之
○嵯峨〻〻藤原為家卿かしけふよりの和歌
始る也　強因法師　　さてより〻〻とも〻〻と
師道八百年〻〻　　〻〻と〻〻と　安嘉
門院四条河佛　　口伝〻〻書之有